

松原

江苏农业学院图书馆
藏书章

歌集

一九八八年五月八日 發行

松原正枝遺歌集

著者 松原正枝

編者 松原太郎

〒920 金澤市石引三丁目三十五

發行者 石川靖雄

印刷者 塚田重

發行所 石川書房

〒160 東京都新宿區北新宿
二丁目二十二番一號
電話 03-3691-2541
振替 東京七-四一八九三

非賣品

序歌

吉田正俊

名のみ知り會ふなき君の遺歌集か歌に寄せた
るひと一生思はむ

歌につながる縁えんの故に會ふ會はぬ分わかちもなし
に亡きを悲しむ

松原正枝略年譜

大正十年五月八日

金澤市柿木畑に生まる 父は第四高等學校教授榎本竹治 母は日下チヨ

昭和十四年三月

石川縣立第二高等女學校卒業

昭和十四年四月

松原太郎と結婚

昭和十五年四月

松原一郎出生 現在東北大學醫學部藥理學教室助教授

昭和十六年八月

松原治郎出生 金澤大學醫學部四年生の昭和四十年十一月死去

昭和十八年八月

柳下道子出生 現在松原病院診療部長 愛育學園園長 金澤市教育委員會就

學判定委員 金澤市障害児保育相談員

昭和十九年四月

兄樗本克彥死去 三十一歲

昭和二十年十二月

松原三郎出生 現在松原病院副理事長 金澤醫科大學非常勤講師

昭和二十二年九月

松原四郎出生 現在金澤大學醫學部神經內科學教室講師

昭和二十四年四月

榮養士國家試驗に合格 同年七月免許證交付

昭和二十四年五月

松原五郎出生 現在金澤市まめだ齒科醫院院長

昭和二十四年九月

精神薄弱兒施設愛育學園を北陸地方で初めて設立するに当たり自宅を開放して精神薄弱兒の教育指導にあたる。財團法人松原愛育會を創立し、その常務理事となる。

昭和二十六年六月

松原六郎出生　現在福井大學醫學部精神神經科教室講師　財團法人松原病院
副理事長

昭和二十七年五月

同法人を社會福祉法人松原愛育會に改組し、福祉事業に携わる職員の採用、給與の計算に常務理事として無報酬で働いた。

昭和二十九年四月

初めて「アララギ」誌に選歌をうけて掲載された。爾來昭和六十一年までの三十三年間に、五百四十四首が選ばれ、四回の歌評を頂いた。屢東京アララ

ギ歌會で土屋文明先生の御指導を受けご褒美に頂いた色紙を家寶とした。

昭和三十三年四月

醫療法人七尾松原病院の開設に協力し、その常務理事となる。

昭和四十五年七月

松原病院を醫療財團法人に寄付し、その常務理事となる。

昭和五十四年三月

義母樫本光死去 八十一歳

昭和五十六年五月

父樫本竹治死去 九十四歳

昭和六十一年九月

肝臓癌の症状を發病、東京癌センターで出術を受けた。

昭和六十二年九月二十二日

肝臓癌で死去 享年六十六歳

目次

序歌 吉田正俊

松原正枝略年譜

昭和二十九年	一三首
昭和三十年	一一首
昭和三十一年	一八首
昭和三十二年	四五首
昭和三十三年	五九首
昭和三十四年	三七首

昭和三十五年 三五首

昭和三十六年 四三首

昭和三十七年 三三首

昭和三十八年 三三首

昭和三十九年 四三首

昭和四十年 二八首

昭和四十一年 七首

昭和四十二年 一〇首

昭和四十三年 九首

昭和四十四年 七首

昭和四十五年 一一首

昭和四十六年 九首

昭和四十七年 九首

四三

五一

六〇

六七

七四

八三

八九

九一

九四

九六

九八

一〇一

一〇三

昭和四十八年	五首	一〇五
昭和四十九年	一〇首	一〇九
昭和五十年	二四首	一二〇
昭和五十一年	三二首	一二五
昭和五十二年	三六首	一三三
昭和五十三年	四八首	一三〇
昭和五十四年	四二首	一四〇
昭和五十五年	二九首	一四九
昭和五十六年	二八首	一五五
昭和五十七年	二〇首	一六一
昭和五十八年	二三首	一六六
昭和五十九年	二四首	一七一
昭和六十年	二〇首	一七六

昭和六十一年 一九首

一八

計八二〇首

後記（松原太郎）

一五

題簽 吉田行風

松
原
正
枝
遺
歌
集

昭和二十九年

夕厨に小豆よらむと残り火を火桶にとりて傍らに置く

わが掛ける電話一つで二百名の患者の食事がきまりゆくかな

鐵柵より靜脈透る手を延べて春日つかみゐる精神病者

今日一日の患者給食終りたり黑板に書きし獻立を消す

純バターを使へば精神患者等もうまかりしとて空皿持ち来る

盛りて出せば直ちに空皿となりてくる重症者のなき七病棟より

新参の看護婦だけが炊事場の我にねぎらひの言葉かけゆく

乗換への驛のフォームに荷を下し眺むる山の若葉が近し

旅行より歸りし夫が病む我に週刊朝日を投げてくれたり

山を望む窓と街のみえる窓とあり君は寝ながら街をみてゐる

ぽつぽつと姑ははの不平をいふ我に答へず牛乳二本夫は續けのむ

水貰ひにきたる工夫らがセメントの餘りで土間をつくろひくれぬ

隣室より味噌汁の香のたちて來ぬ今日また一日睦み過ぎむ